に付御奉行様江御親類之者ニ而御座候

御改之上可申渡候処可被下候

手形如件

五人組

山村氏

市兵衛

東西遊記序

石州別駕橘君以攻醫漫遊四方足跡殆遍天下其所記載率皆修治之案經驗之方而攷有嘉績則必咨焉人有卓行則必訪焉及登名山覽古蹟歷問殊俗搜采異聞者數十卷

名曰東西遊記好事家往々傳誦之至有謄寫而藏以爲帳中之祕者書賈因屢請刻君終弗肯久之一日俄語余曰此書之行非吾意也何者蓋家業著述猶未脱稿者居多而首用兎園册災木恐致有識之誚而

會坊間射利之徒有謀私刻於是不獲已遂授剞劂將奈之何盍為吾書一言以弁於卷端余乃竊謂曰夫橋君為人志於道勵於行旁好唐詩及國風考鐘律試星度其為醫也固亦隱乎小伎爾而況此書就

其中特文緒餘者乎然善讀是編
者可以興起感發秉彝之良心則是
還元氣也破井蛙之見釋夏蟲之
疑則是起沈痾也其醫人之效亦捷
矣不必事於刀圭間此豈與世之紀
浮蔓詞彌文徒資風月之談供觴

咏之具而已者可同日而語也哉君其勿多讓爲是爲序

寛政乙卯歳秋八月

愚山松本愼

凡例

一 予醫学修行の為に漫遊(まんゆう)せし事前後合せて十
年東西南北到(いた)らざる所なし然るに此書只東西を
記してあるものは京を日本の中央(ちゆう)として二つにわかち
て東西とし南北は其中にふくむるものなり

一 予が漫遊せしは医学の為なれば醫事に関(かゝは)ること
は雑談(ざうだん)といへども別に記録して同志の人に示(しめ)し只
此書は旅中見聞(けんもん)せる事を筆のまゝに書(しる)せるも
のなれば後(あと)に至る事乃虚実(きよじつ)は正しからず誤(あやま)り有るべし

ますも多くのるべし見る人其杜撰をとがむることなかれ

一此書中にあるせるところ其事まれにくはしく付くらひ考ふるにて

ども多かれどもみなし此書中には愚按を加へ次に識

論取捨は見る人の心にあるべし

蘭谿誌

東遊記目録

一之巻

二之巻

○不食病

東遊記巻之一

鎌倉

橘南谿子著

鎌倉ハ東武通路の人の尋ぬる所にして路もちかく殊に又名高き地なれバ好事の人ハ其名所旧跡山川の勝を探り神社仏閣に詣て懐古乃情にたえず先鶴岡の八幡宮に詣づ甚壮麗男山にはすぐべし仏寺も建長寺最大刹なり露坐南面のきざはしを登りて見れバ大なるいてうの木あり若宮の別当公暁将軍実朝公を殺し奉りし所なりと云八幡宮の正

面通一の鳥居二の鳥居三の鳥居あり其鳥居筋を
真直に下る事八町由井が濱に出る也一の鳥居より由井が
濱までは十八町なりとぞ扨鎌倉は四方山にて地面を
狭し縦に谷の間々に屋舗を構へ住居せしとぞ
又西其外に比企が谷大蔵が谷扇が谷など谷々の
名のみ多し頼朝公の屋舗跡は八幡宮の東の方にあ
り此地ひろし平坦なれど三四丁四方ある也後に其外の
谷々の世に存せずして知る事なし屋舗跡の少し上の方
に頼朝公の塚あり又その傍に薩摩侯乃寄附の大なる石

事も微なる事にして禄金といへども今は四五万石の
大名の城下程も多き事と思ける也禄金を高山
多く大河も多く要害の地ともいふべし凌只小き山数
囲四方に連りて波濤のこと〳〵し其間の谷々も甚狭く
打晴たる平地を絶てなし但源氏に由緒ある地なれ
ば故郷の都しあひしゝや伊豫守頼義朝臣
爰に住し安倍の貞任征伐の為に東国下向の時石清水
八幡宮を此地に勧請し給ふ其後又相模守住し禄
金に下向ありて此所にて義家出生し給ふとかや

先祖由来のある地の名なるよし鎌倉と名付しと初ハ菅
大織冠鎌足公鹿嶋参詣の時此地由井の濱に宿
給ひける夜霊夢によりて秘蔵し給ひし鎌を当所
大蔵山の松岡に埋み給ふ故地名を鎌倉郡といふ又大
蔵山を鎌倉山とも名付しと也其外神社仏閣甚多
く古跡旧蹟種々社名ある所委しく筆にあけかたし
まゝにいる後あし次第七二三日七日も逗留して所
を廻り寺社の旧記なとしても一見せバ面白きこと多かる
べきにしばし戸塚よりの入口まゝありて其首鎌倉総草くに

一見し並よりて遙に生ぬきバめのいふ事もなく見遙
てるしぬおつま多し

竹根化蟬

越前府中の南二里よ粟田部といふ所の東なる
ぶり町作りまて此辺まての総名なる里之吉清継體
天皇大跡部は皇子にて隠し世かひし時此所に御座
ありし在地名を大跡部といひしを後世あはて一く
いひ誤りしるまこと也此所に粟生寺といふ寺あり天台
宗にて坂本西教寺の末寺にて隣る大地之仏寺乃

住持ハ余が方外の親友也此花を祐が時も六月斗逗留
せり其前年が事なりしに此寺の小庭にある藪
深堀欄くくありし小竹の根ことごとく蛇に変化
しく既に生気備りあり動揺して早地上に出
かゝまさるもありいまだ半ハ竹にして半蛇に変じ
こゝりたるもあり色くろうして数百本に及べる物
ハ小僧奴僕なども恐しがあまりにすさまじき也
珍らしくもなくやみしともなく住持ハ生類を害せん
ことを憐ミて又土に埋ミ蛇に化せし竹もならもとのこと

しき長浜よりし山の芋を堀出し料理する此中に絹村
のあるよしてく何の重増アりし后青き湖水に鈴傳あるよし
而といへば武蔵菅薦いろおそ此の変じたる半数ひまじ
といへる毛羽のしくたる人を自ら実乃人かおもしろしぶめ
「もしもや

十府の里

とふの里はいにしへ人菅菰を作り出して奥州の名産
郎なり仙臺の北東の方一二里の所にありて今も
いま玉田横野宮城川をとこえの橋多賀城壺の石ぶみ

當國の名所古跡古事古筆等に心をよせて委く寫し
當初の作者ハ仙臺藩人にて佐久間洞巖とて享保
時代の人也名ハ義和字を子嚴太白山人と號し但
徠などの知音也其子ハ今仙臺の儒官にて姓を新井
と改め宇喜藏四郎と稱して名ハ義質字ハ子敬滄洲
と號し齢旣に七十年に近し右の書寫本なるが田舎故に
其人多くハ他郡にて此書の名をだに知る人ハ
し予ハ仙臺の士奥田直助といふ人の藏書をえて一見し侍る
に其人いへる事ある筆記の白本屋某より一部

書写して役所に納て何となく世に流布せし書にも是を被下府
の里まで行て見るに象潟村と塩竈との間にて街道
より左に入る所に甚古跡あり菅薦も今は名のみ残れ
り

吹浦砂磧

三月十二日出羽国酒田を立て吹浦といふ
里まで行しに其間六里にして路傍に人家なく
又田畑もなく左は大海右は鳥海山の麓にて
広き砂場なれば通路もまぎれやすく往来の人は

應瑞

まされバ笠も何方へか吹散りぬ雨ハ横さまにふり合
波ハ頭より上に舞上り身をうちてぬるゝにぬれて甚う
くるしき事いひもはつべうもあらんされバて此あら風
あらし此浪にも迷ひしが只急ぎにいそぐ程に申の刻
ばかりに吹浦へ着ぬ扨しく此所に泊す越後出羽
の二ヶ国ハ街道北海にかゝりして直七十里が間ハ一里も
砂原を歩ゆくなれハ少しかたよりにも足首迄ハ常に砂
に埋もれとすれども只退く心のみにて進む道ゆくかたぞなき
難儀の世渡しとよみしもおもひしらるゝ時に九月の頃か

三月末まで毎日にして風吹ざる事なく沙塵常に
天を霞ふ唐詩にいへる沙風動地なる景気なら
ん其吹ちらす沙風の吹返しよりて所々に吹たまり
或ハ堆く塚のごとく見ゆ其形変ずるさまと少地乃
草木も皆秋の末より枯れ末まで青き葉ハ無く
渺々たる砂漠に白草ハ風に動く体この塞外沙漠
の人の作れる詩にいふ所に少しも違ハざりし北極地
出る事四十度にあたりて塞北の地にひとしかれハ
かゝる風気の相似たるも怪しむにたらず日本のうち

又遠く望見れハ烏山のふもとし是を男鹿山といふ境の住
吉の浦より陸路遠望を望むかぎりし此地ハ同じ出羽国
のうちも格別の地にて種々産物も多く出る中に材木
の内外杉の木多く世上に秋田杉といふハ此山より
出るをいふ風景も他に異にして其中に葛雀の岩
屋なとの奇ハ世上の人も知る所なるも此男鹿山の中に
赤神山といふあり此山上に祭る所の神五座内一つを
漢の武帝と崇め一つを蘇武と祭る外の三社ハ我邦
の神なりと云此地の海仰ひハ匈奴の地にして蘇武か牧

羊八代男鹿山と云いつの頃よりいひ初ることにや
さだかに聞もしらず陸奥会津の辺
の風土気候まことに稀なりとなん
いふ中にも思ひ寄る夏の頃は秋田湊の辺の人
船にて男鹿の島を廻りて此山の林をまとの色
の奇境を探るものありとぞ此外には
風波あれば外なる雑きものなり又庄内秋田領
の境にも女鹿といふ所ありて男鹿と相隔つ
其中二三十里ありて男鹿女鹿といふこと也

あるとしのこと彼国の人語りき抑此男鹿山の内に第一の奇境といふは蔦崔の岩屋なり山の麓海辺にあり此洞八月の比は海潮至る頃打合せ来る潮洞穴に及ばざる時は絶壁にてさらに入るべくもなし潮引て此洞に及ばぬ時小舟にのりて暫し洞穴の中へ舟を入るに凡十町ばかりて自然と洞の中明らかなる所ありて潮浅くなりて舟をこぐことかなはず舟より上りて猶奥深く入るに沈々として洞穴広く細かなる砂清くちりなし

遠山も人家も別の世界にハあらず唯男鹿山の内ゟ
又ハ秋田辺なるべしともおもはれず兎角
山の絶頂にまで見渡さるゝ所なりおそろしかりしハ折節に
境にてもあらんといふ我旅だちしハ八月の比なりし程
ハ此洞中へ入りてみざりしは残り多し

埋木

仙北のうちに一里ほどに名取川あり名取郡を流
るゝゆゑ名取川と名付甚大河なり桂川に似たり
仙北より通路せし時名取川を渡りしと聞けハ埋木

新渠の碑あり巌然として旅人の知るかたなり
此奥田氏名取川の堤を修めて田作の水難を防
し舟川から底より地深く掘出せし木あり守よ
親しくこれに撰ひまゆくと見れと名取川の埋
木ふのみそしとや器に彫るとして出せる紙
尽るに実に家知るるとのすゑて殺す
年を経ふりる木にて色つや性は何たる志自鶉と
ことに色よく見とを磨けは光沢あらはれて甲斐にも
のやうなり石炭海松なとも拾ひのしく

木理あざやかにして毛やはらかなれば
作人めづる狸毛なりとせしにおもへるにや陰毛[illegible]
ふるく例の腰折ならねどよみし[illegible]東[illegible]
細あんでおゆるなづかなる小き香紙に造りつく
筆は左右にすぐれ青の筆にならび出て我家の寶
の一つとはなりし西遊の時に得たりし技奏
末に似く読木にも劣らず覚る

熊突

加賀越中に世に名高き熊をはさむ熊膽を

こゝろ僻遠のおもると極上のものとす余越中に在
りし時飛驒境の山中の人に出会て熊をとることを
と問ふに猟者も亦雪猛なりといふ事ありて雪を
猟る時は熊諸穴に入て住む是時猟者ども薪
をもつて熊の住る穴を押一挺入れて
熊出ざる甚薪とうしろの方へ押せば穴の
奥の方は熊ありて甚熊脱く是穴の口の方
へ出ば穴押つめりて熊穴の外へ出る時にさ
こしらへ前の槍と鉄砲を用ゐて

素絢画

穽く之熊穽より出なんとする時槍をもつて捻んとして
く槍にて深く身を害して猟者ハ始終その鎗を
まもりて設取付けてかけの猟者と待つかけの猟
者是を見つけるまでまさるかつとはやく熊の頭をあて
打ころ之とし槍を突てんじぬれハ熊の掌に
て槍の穂先を握るに丈夫なる槍の刃二つ四つ
に折れ砕くたあれハ猟者もはなち数ることして
なり余計を持てかく手振の危き傷とせんより
とかく鉄砲すきハうつくまさるとていへハ鉄砲ハ猟あ

やうしくいふいふおとしみるまでとし月論でおもらべ
まで付るさまにて人鉄砲の玉熊の身を貫くして立
よも怨ちらかるまにてはうみ殺するの猿ハ猟者を
猿を取付ある故ふ為かるをあさハ足さか人命
を矢ふて為しやくしくも鎧への熊もハ中に矢背
うくれとのくも負ハきるるハおぐやうたのるのの事と
生得てきるく自空なりと猿まる猟ハ漁者らし
此不處に猟師ら山に鹿ある盗賊ハ又利欲ふ費
あり諸其歌ふ云ふよ費あのと見る

手葉石

予ゟ越前國敦賀ふ行ゆきし頃ハ十月の初なれハ
しぐれ例ならバ暖かにして北國なれども小春の
志るしとて折節き天氣うらゝかなりしハ彼地の
人にハいづれも其地にて人の手葉石といふ城
ありまろの敦賀の町を離れ西の方に出せハ
きよらかなる松原ある是ハ一夜松原といふむかし
神功皇后の御時異國より賊船多く攻來り
しかば此海濱に此松一夜のうちにおひて掩り

蒼々と多くも集りまし茂敦乃目ハ鶏頭軍
蜑の礒の生物と見えて驚る程恐き迹去りまして
いひ傳ふ諸に松の木ありて真砂の白き海小
國より路家出地ありて丈より五十丁斗にして常宮
ともふある入海残漏して敦賀の所に向ひ合せて
まづ南にありて土地として風景殊によろしきところ
人の遊興の所なる宮ハ仲哀天皇と申まつる大社
なる遊行上人など此ほど經歴の時も此社へ詣
ずらして年々遊行上人代々奉納の砂和哥

て此所は邑の峰に古樹の蔭ずるとて石碑ありあまた
懐しみある人勧進をなしてすゝる時に仍しなくしめを
こゝしはふかやしの石伊勢がはるも彼地にきこえ
鸚鵡石とて名有く附図関東又は九州辺までは比も及ば
甚其日は天気も晴れ至て親しき友人大勢ならて
杯酒のくみかはしけるおもむきは一しほの興をそへたるすべ
て此辺まで勝地多く此山の山水の拵色の濃くてい
ふ西行法師芭蕉などもおもしろ遊べる地ならて風景名高る
しるしも様子にまじゆてまちむかしよかしき

歎ずるにもよろしく杠ともしられて龍宮に得たる也

甲冑堂

奥州白石の城下より壱里半南に才川といふ驛あり此才川の町末に高福寺といふあり奥州筋の名
年の凶作に此寺も大破に及び住持もなくて今は荒
是しりなく僧も不住になりきるしもあり寺なるすぢに倒れ
へ零細しけれバ寺も見るかげもなく屋ハ草深く庭に瓦の
まろみうしなひ餘りあり此寺の傍に又一つの小堂あり俗
に甲冑堂といふ堂の書付には故将堂としあり大

さ境に二間四方斗の小堂之本尊ハ右のごとくな
り此小堂の破損ハいふばかりもなくあさましくて椽に
あがりて見るに内に仏とてハ無く婦人の甲冑し
て長刀を持たる木像二つを安置せり いかなる人の像
なりやと尋ぬるに佐藤次信忠信二人の妻なりしとや長者
義経鎌倉殿の義兵をあげらるゝと聞て秀衡よりて
同心して鎌倉へ赴きぬる時佐藤庄司我子の次信
忠信をも供に出せり度々義経ニ忠節一功を盡し平
家を追落し一の谷八嶋などにおいてさむらいの大功を

たくしたひて再度奥州へおもむかひし時もおなじくつき
従ひて出られし亀井片岡などゝ落合まく
帰洛せしに次信ハ八島にて能登殿の矢先にかゝ
り忠信ハ京都にて義の為に命をかろくし兄弟二人
ともに他国の土となりしく形見のくろかみを母なる人
うけおしく歎きて無量に悩み給ふる人此見るにつけ
てせめてもこ一人なりとも此人のやうに悩みなぐさめ
継信忠信のつまと兄弟の妻女甚根を積重し我が
夫の甲冑を着し若々と御前へ出でけるに生

立しめ兄弟凱陳せしに其傍を尋ぬれば老母まん
せ其名をたづねしかば其母の人も二人の婦
人の孝心あつきに思ひしにや其姿を木像に刻
みて祠しまつりしに嗚呼兄弟の人は古今ためし
なく忠義武勇乃士なく其人にほまれあひし婦
人又希代の孝女にて夫婦忠孝の名誉をしも世
にめづらしきまでなり余州揚跡残像残
もるにいたり落涙せりかくこの人の難をもな
るべき孝婦の像乃かくあるまでもえいる小堂の[illegible]

どうぐハ陰だかまく彩色も落失せ僧だみさびれ一だくして
香花を供する人も無く年月に荒果てゆきほどふ
まれ悪くもなかりしく先祖の事を詳に語ふ
る人もなくかなしんを語ありくありしとりして一講之
の未然をとぶに供ずる人も無きハ世の忠孝の感応
る人のまくなれるやあやうき時ハ必ず見へしかば慮
安世輔翼する

東遊記巻之一終

東遊記巻之二

松前の津波

奥州は津軽領三厩より入る事也松前福山の湊
わたる其間僅に七里程隔てて青森の山々乃
高き所に登り望めハ其三四里斗まても遠望すべし
此所に逗留せしに一夜此家のあるじなる
の老人来りぬ是ハ家内の祖父祖母なとも集りて
圍炉裏に寄て居したしく四方山の物語せしに
彼者ども語りしハ抑此二三十年以前松前乃

律波猿ハおそ旅しけるしてハあらひさまよひて佛
神をあそうじ尤よく其旅しめしるく甚忘るも
のちしうじ打ちつかまる人間甚時まて露忘るる
ぎしく海邊乃者皆弘らせしなくる空てよこ
方まても皆乃ひ出ひてんと云膝まへあらすく
いふる年おくさるしやし聞ふ甚注風の
静ふ雨しきとのうしる品にのしるく南の氣色お
くめんするやうなりし小旅るしくおく出して
て東西へ虚空を飛行するものあり衝しらぬ

其上又目前にあらはれしは白昼なれどもいろ／＼乃神々
虚空を飛行し給ふ衣冠にて馬に乗たまふも
あり或は龍に乗り雲に乗たまふ或は犀象に乗たまひ
又其ほかの白き装束なるもあり赤き青き色／＼の
出立のもの一々姿も或は大きなるもありまた小さきもあり異類
異形乃佛神空中にみちくて東西に飛行し
玉ふ我々も皆外へ出て拝みいとも難有くをがみ
奉り不思議なる事かなとあきれ果てゐたる
まし四五日乃程もいはんかたなくあるは夕暮中の

方とハやまをかけり真白らしく雪は山のつらを枕
その途中あまたんよ又嶋きなかるとの海中
よ出来まかしいふうちまだんく小舟く寄り来
まつしくるく見えし嶋山のことおびしく来るとみる
に大浪乃おしよせすハ津波て死しもや逃去老
若男女我さきにおし逃迷ひしうく志ばしの間に
おし寄て民屋田畑草木禽獣まておしながらに
海底はみくづと成果生ある人民海辺の村里
ありし人もことぶし我くも遥に見へしよりも浪数千

海乃底より潮吹上る事あり川と邉ふゆりより黒乃
かゝりし明なる大よ野る程大変ありて騒きあひ海
嘯といふものありへや何かりひとたひもなし諭まし年
月此頃ニ筆ありすへく小海邊ハ此時皆何の事もなし
海の底大いに潮湧ともく騒動せしとて何の事も
みえもいひしなり彼松前の波たきの比書北溟一
面ニ動きしとみへたり誠ニ希代の珍事又
後世の心得ともなるへきものなり
寒氣指を落ス

寒國の人餘りに寒氣強くして雪を侵せば血凍り氣の巡り絶えて甚しく時ありて暖氣を得れば手足の指皆紫色に變じてやがて腐り落るなりいかに療治を加へても治しがたきものなり余も此病人を度々見しがやはり脱疽の種類なるべしいかに寒氣甚しければとて指の落ることやあらんと疑ひすて居りしが北地の嚴寒に遊びて一冬すごせし年とある人のいへるは畜類までも指落るものあるよ出羽國秋田領の内

おりひしハ不思議に思ふまゝいろ〳〵しても慈悲の〆しハ神
明の冥助(めうじよ)といふべし足(あし)ハちぎれて菅(すげ)あみの編(あく)
るまゝ当(あて)行しら泥との跡付て足先さハ足袋(たび)戦
たる手ハ甚しく爪掛(つまがけ)として世界(まう)まゝして指先さへともろく包(て)
ことしもとより草鞋(わらんぢ)とちく事なれる身なれバ幾重(いくへ)にも合(うら)
股引(もゝ)破(きて)れし頭(かしら)より頭巾(づきん)の上(え)ハ深(ふか)き浮(うき)をときて引甲
ハ紙よりも薄く一日もたまりつもりなりし雪深(ゆきふか)く道(みち)
のよ三四尺以上も積(つも)りたる時ハ爪先(つまさき)濡(ぬれ)て冷て
反(かへつ)て凌(しのぎ)やすし雪緩(ゆるみ)ぬに寸斗ある時雨風交(まじ)りて

道路泥田のごとくなる村を膝までも濡して其爪
先抱たゞ人幾重包みても雪の志み透りて其
はいたさ頭迄も徹りて只今も手足を首を切るゝ矣
ぬべく覚ゆる横さまに降る雪吹まくし頭巾の
息より眉ぬけしく其露眉毛に氷り付眉毛の先
ことごとくツラヽの如く下りたるあり夕べに宿に着て
て先草鞋脚絆を解けど彼地の者共は
囲炉裏にくべ路といふものゝ初の泥をあらはしくとり
このしゝと鋪りに脚半のとけざる事を教めてく

小便せしくは踊りまて足さしひへたるに火のあつさ試
みんば、や、醒しく漸く氷解けしに溺り出て
はじめて足袋草鞋もしくはなくしてしもたちの氷
をふみて石路もしくになりつゝけざる事あまたゝび毎日かくの
ごとし小地よく路發しもやうのことし又餘りに
いたみたへる足を急に熱湯かけに浸せば血乃気いたり
損じて足もしく腐りもしいつも只初はぬるき湯
にて洗ひ漸にまあつき湯にてし浸すはよう
すべきなるべ

小杉乃盛久

越中の小杉といふ所に至りしは十二月なる比よ北国のならひ路に積りし雪に沢づき途を失ひ来ふされに我と友二人悦びける雨合羽よ日覆よまとひ破ましける御供ありつけかぶりて蓑笠おふむかし持もあらぬ各の荷物ふしけなく背負ひくるまこゞえ歩きかはさるさまありけるもいと哀に人目のみ見合く色合傾なども主きる人里とく行先きはけりさきれは此辺は宿也

て四十年かゝる雲仙乃末終のまゝ入の福ろよくかげゝ
よしに其義を省し岡田中ふくさげよおりいとく
行るゝあるを聞くの村小松への道おしへてくべしといふ
ま我も其方へ行者なり汝に付して急ぎ足早よ
に行所に従ひ壱里斗も行程よ彼男はふ中く並び
の人をいづくよりいづくへ越し給ふや又何の用の生
給ふ余答へて我くハ都のほとりの医者なるが彌彦山乃
方へ志しくまかるなりといへバ富山ハ比所より程とをし
彼地は道遠し志給ひぬやと問けれバ余よくバ其ハし

されば悲しといひし遊覧せしは遊興の人多くなく珍視とする人もいと少なく客舎昼夜群集せしに一夕余話の席一の奇聞譚りて出しに富山の人も手をうちて笑しぬ

名立崩

越後の国糸魚川と高田とのあはひに名立といふ駅あり上名立下名立とて二つにわかれて家数も多く家建も大によろしく所も繁昌の地なりしがもとより南は山を負ひて北は海に臨める地なる

に今年より二千七年以前よ名立給ひし不二乃山
二ツにわれて海中より岩の上へ入て一駅乃人馬鶏犬こと
ごとく海底に没入せしと云ふ其山の跡今にも湖水
広く真白なる壁乃ごとく立て今和も世界下名立
まと一面して所々人よ其あらん中すまじとえも不
浮く商旅婦ハしてハへるハ名立乃駅ハ海道乃
中なれハ悪しくて漁猟を家業とするに其夜ハ
風静なりて天気日よりにしてある時ハ一駅
の者ども夕舟に打乗て鱈鰈の類を釣すむ

程ありし時刻もやうやく夜半に至るほどなりしかば
くらきもなく只一ツ大なる鉄炮とおぼしく音聞え
しかるに其跡はいかなりしやあるものふしを時らしく
の山二ツにさけて海に沈しあとありける所に家の
家は一軒もなくして老若男女牛馬鶏犬までも海中
のみくづとなりし此中に只一人ある家の女房床
の枝にかゝりて波の上に浮みて命たすかりぬあはれ
し此女の物語にて鉄炮の音と聞えしは実
え地しんの後は只夜中のうちにて海に沈しとも

ありけるに此まことに不思議なるは初の火事におそく
悪くみえしこともありしそれ思えに一騎の者どもありしに海
へ集りて死失せしとなり公の手に失くは男子たる者は
大くも狗のるに焼ありしことなりしは活けるべきに一川
やよ集りて後ぐゑありしは識に因果とやいふ
べきあはれなりしとて語りつつ家にて後人に小大
地震につき地も遠方まで見れば赤気立のぼりて
火事はやくなりけるのちも立有て松衆の津波の時雲
中に仏神飛行しければいふまでもなくふる

へしや
此名こ乃驛ハ古人佐渡へ渡るを経ひし時一首しるひ
しかなんしける神る竹内杢支といふ者の家に古に旅
冊を為おせりといふ其やに
都とれちもし へ出て今宵しもう程ふ名こそ月をつらぬ
是ハ菊亭大納言為兼仁佐渡配流の時此驛まをしよ
みぬる和哥なりといふ或説ふ順徳院乃御製とも云余
ハ其短冊こそなしるべいつまもしぐれさむぐ寺乃住
下さる人の作りやとぞ可る文名こ之の次ふ長濱といふ濱を

出入路は往来乃人の跡絶て道たえぬ越の出羽なと
いふ高声もあらじと此あたりは都遠くまでつゞ
細き土地なりき

米山

此地の人越後を二つに分ち上越後下越後といふ上越後
といふは高田領糸魚川領なとをいふ其東に米山といふ山あ
りて其西の麓に関所あり其所を鉢崎といふ又柿崎と
いふ所あり鉢崎に並で此柿崎はむかし親鸞上人此
所に行暮て宿をもとめ給ひしに宿のあるじ心悪き者なりの

らく八肥前乃雲仙嶽三里ゆりて絶頂に氷田ありく
農作あり其水ハまづはじめて行の識ふ足るとや
寳山ともいふべき

九十九橋

越前國福井乃町の真中に大なる川流る足羽川にかけ
渡せる橋成ば世人に橋といふ九十九橋と書く其太さ三
條の橋程也あとく半までハ石橋なり石橋の大なる
ものの天下に是ほどのものなし其上又は橋ありて見たる
常らしの橋なる石と木を續合せたる橋ハ珍敷橋也

竹堂紀寧

いふなる者を聞るに皆石橋となす其時ハ大洪水の時全
倭にも此崩れて其後再興大きになしくしるも本朝橋に
せる事ハ大洪水の時木の不朽ざれバ崩れて水溢まずる患
に石の不朽ハ憂なくして橋乃今に保換ずることなし故に
橋乃造作容易しく大なる橋ハ何れの橋もかくのごとし
されどもの橋ハ普請の時も石の不朽ハ千歳不朽なる
是ハ只木の不朽ずれば朽るすく渋にてなれハふるもや
ものなるべし又福井の東に舟橋あり越前にて名
なる名所も是ハ越中神通川に渡せるものに不及

越中乃神通川ハ富山の城下の町外れを流るゝ是又
急大河にして東海道の富士川抔に似たる水上なく
しかも此山深く水玉のしくけれバ毎春三四月の頃ゟ
あまねき雪解乃氷村の前に押出ろく例年此方の渡
水口でし常に東風ゆへ押出る水風に味蔵ばるを南
よりかの海へ落る川ばかりかくのごとく毎度濁味あるき
これ急流なれバ常体乃橋ば架る事かなはぬ所の川なり
されバ舟橋と号けらして之先東西乃岸ゟ太なる
柱ば建て其の柱より柱へ太なる鎖を二筋張渡

其頃に舟を繋ぎならべて板を渡せり是乃
数二三多くして百餘艘に及べり川幅の廣き事
おもひやるべし其頃乃如く丈夫なる様に目
を驚かす頃乃京中二條通に繋ぎ合せしにあつて
然るに大なる杭を打ちせり洪水の時切る事なりし云
東岸の柱の跡を尋ねて大仏殿の柱よりも大なり追
くに此の人の柱をもつて丈夫に構へし頃にはふさぎて
舟は浮きもして水にゆられ捨るといへども大坂に
昔に浮よりて危き事なく橋杭なき浮橋の様く

越前福井乃九十九橋の領ハ石本田孫右衛門造る
事あり領をといひて誅に此領容易の事にあら
し又奥州南部の城下にも舟橋あり是も大
なる廻り越中の舟橋に不及又舟橋乃ある所
天下にわづか三ヶ所なり一ハ越中富山一とす又
しれる常の橋の長きものハ世人よく知る
所にして東海道の岡崎矢矧乃橋なり長さ弐
百八間あり是ハ天下第一にして橋の名をば
くして奇妙なるハ周防の岩国の錦帯橋也

唐画乃つゞくるハ長崎が目鏡橋く兎現まる
甲州の猿橋高くして奇なるハ越中の桐山
乃橋なりされど遠国山中よ綱渡せる下乃小橋よ
ま、朝六ツの橋うづもし橋なりし奇妙乃橋なりけれバ
野六ツの橋ハ飛騨国山川よかけ渡せる石橋よ
ていふなる暗夜といへどかゝる橋の上ていかにもハお
し明らかなりとく人郎も見えまとく人ハ野六
ツ法のあるのてらし数多主従もりしよつ野六ツ乃
橋と名付くとこのや物好きなる人のいひしハかけし橋

のやまに名玉ある岩あるべしと讖にもありけれど
く見えず

塩竈

奥州仙台城の東北四里に塩竈といふ町あり
塩竈明神とまつる地は北の方に社ありて名は塩竈記
の地すべて家数も千軒に余りて旅籠屋あまたありて
仙台城下の人の往来の場にて海を隔て記
船も入りて村に繁昌す塩竈明神社家本殿大
美麗にしく去年京をおしはかりていまさらん

まる事之一生ハ人ゝ悉く信して月参り或ハ講を結ぶ
扨て九州乃人の宰府の天神ま詣るがごとし
此地繁昌ハ旅籠なども大ましく又多し酒魚物ま
至るまで沢山の社の門を入りて左の方ま行の
焼物あり細の墓ありて其上に九輪のごとき物の
あり塔ハ然らす墓も残りすて細き石墓と大
袋乃不残まく真古物しる蓋もあり又
新あなり梅丈袋の前面の上に称号なる和泉三
守忠衛敬白の文字あり霧衛弥守府将軍丸

色くろくまたらに変じて黄色とありけれは地獄まん幕
其ほとりあつくいふ釜の大きさ凡四尺余深さ幾ら或二寸
或は四五寸に不可思議なりし其の大小浅深ありて四つとも
小あたりのうち極て浅くして足を鍔に無く其の形た
くへば家く常に開ける本乃丸盆乃ごとし全体石にて
作れるがごとくにして甚高さ二寸斗もありて奇妙なりし
思ふにこれらのもの実に神代の舊物にして五万[illegible]千年
の物なるべし伝へ云塩竈明神上古の世此地に降
臨ましまして初めて此釜を以て海潮を煮て塩

なんしろ云伝ふ銘ありとしも其銘も尋常の物ま見ハ今く
奇しきるに書きたるに是釜八諸小上古も藤物にて
て評物しもりそし播州の石の宝殿と其余ハ而矣
小奇物なり

東遊記巻之二

東遊記

三

東遊記巻之三

文武の餘風

佐々成政越中を領せし比敵に圍まれ勢ひ甚しく
わが味方の助け無れハ我城をさへ守り兼しに付
しばらく思案せしが濱松ハ遠くてのちなく
なけれバしばらくりて救ひを求んと欲すれども四
方皆敵に圍まれて出べき道なし時節ハ極月廿七
日の事なれバ夏ハ日ごとにも雪消ぬ越中立山嶽よ
り峯まして數丈の雪封じたく禽獸さへ食ひ断さ

る附ゐみ是ハ敵も陸路して立山の方ハかゝるまじく成
政郎從乃近習斗を召具し忍びやかに城を出て雪
深く埋しける立山の絶頂へ雪のうへを真一文字によぢ
登りまた絶頂より南をさし谷嶺といひける雪のうへを
よぢの處をたどれバ信州松本へ落付ける事さまよ漢松に越
えて恙なく救ひを得られし雪中に立山を真逆し
越ける艱難中々言葉にはつくすべきのうへに越ける跡
を成政がごとく越といひくが只今も雪氣の消る時越中
我山より信州松本へ一二日の間に越る事立さらぬでに見え

法度の事なりとて至りかたく蝦夷の地ハ彼地の人も秘することにて江差の道と通りて行ハ箱館より松前へ六七十里もあり餘程ある所也一日か二日の旅に行道なり此辺ハ寒中より翌年春に至るまでハ常に時ハ去りがたしと甚だ細く人跡絶たる極深山のごとくなれバ草木生ひ茂りて行べき道とさへなきあるひハ断岸絶壁乃所ありて細る所ありて飛越などするあるひハ猛獣出て人を食ふ数十丈の雪積る時ハ断岸絶壁乃所も皆一面なり雪にうづまりて人ころび落る

ふも雪の上を見しハ目撃するはなし又大樹喬木
といへども皆雪に埋れて一面の平地のごとし猛獣又皆
逃隠れて穴より出ずして人を害することなし此ゆへに
雪の頃に塩を運びて命をつなぎ谷嶺池川の分ちなく
く真直に越えゆきて甚だ近き事と越中の人語りし
多く深雪ありしあゆ国の節しかるを事也あら此の土地の中
日本寒国の中にも別して寒さきびしきなり出羽奥州に入
て見るに寒さに立山のごとくなる越の中初めて識のうち
と思ひ惜しみ津軽領にて青森といふ所の南よりして

里七十里或ハ百里にも餘る所我越後ハ一日二日の路に
ても其なかの此所津輕の外が濱通解田蓮田通より
も今別三廐迄ハ雪中にて馬越山抔越えしにも
くてありし事之を餘一里二里五里七里の程ちかき
所さへかくのごとく雪の深く越しく行とおもへる所も
し事にハ皆新樹或ハ熊笹なども生しひ茂りて色ひ
かく程所なる北地數十丈の雪積り村々家々の中
ふかきハ雪皆積るゆゑ氷く甚堅くいふ所なれども落
なきといふもすなし南國の雪の樣子とハ大に違ひある

より軍中に彼地に掲げられハ信じりけるにて饗御

先祖政宗乃和歌に申くにはまことに道ある道にて

雪は猶乃ゑき山里とぞいへりし兼てハ解しがたくらえ

かゝる是等の事をもつて初て代平治盛せる後の正

宗ハ戦國の家中に生まれ東方乃夷なく甚佐

に勇猛の名高く叱咤の威ある者なく今に至り天

下一二の大諸侯と呼れて基業開きしも只兵馬の力の

みにもあらしやさしき詩哥にいたるまでも志ありて誠

に文武兼備真の傑の大なりといふべし　集外歌仙抄に

仕へし吉村何某と聞えしハ殊に手跡乃誉を高し
今の太守左中将重村公も和歌の聞えあり去年の
中秋東武よての作とてある重逢あへぬ世の磨
よ曇りて月の高き山の端しも見ゆる軒端
名誉なる人とぞなりたりしやと語て感歎ぞ聞ゆる
謙に御先祖正宗公ハ文武乃大将ニて生鍋風雅に
存せらるといふべし

正木勘衛

正木は後に進していへるハ美濃よ大垣の家中ニて藤

の武士なり此人劔術の妙を得て此門人となる者一ハ
位を授らるゝ之丞郎抔にても此位を傳授しける人
多し是則江戸抔にも是多く流行すれども門弟に多し
此段に進の劔術の奥義に付て世間多くの弄好の
ものなし多くして信しつきてもあるに旅中に
て彼門人に親しく交りまして彼修行者のあらましと咄し
小傳小藏ずんばたゞとにもつきまとひ此段に進の父祖
よりや育ち幼年より劔術に志を寄せ日夜寝食
とりとして修行せし法一夜寝間の褥を巣の咳を

に因ることあれば起きて遂にらしふ嵐逆き者あり
暑しておしく慄つくしまる流まて嵐弱く
擾ば喫む又因ることく遊べば嵐逆する心中き竭く寐
つんしもしせバ嵐擾を受むかしのごくもしま耳一之
四肢に及びて股こし進出ふやう秋氣ちとすして
彼嵐に徹せされいし終眠るに従出て嵐擾ば喫
なりそし起まり座と正して一心に氣をあつめん
嵐の方とちりはめて握りしるに嵐はひにか
從是後八嵐の音ともる度にかくのごくもる仏嵐

格別先未熟に修行して名ある用あつて其上幸を感じ

一 又彼猟取持の者ハいかなる強敵に逢時にもおく
れを取事なく又いかなる猛獣猛威といへども此猟を
取持する人ハかならず得てしてあやまたず是ハいかなる事
なるぞかくまでいふなるやと尋しに何人か申せしハ此
の門人に猟の猟を学んと欲ふ時先誓約をなさしむ
其誓約乃辞君に不忠なる事なし親に不孝なる
事なし朋友に信を失ふべからず虚言いふべからず高慢の
心を起すべからず次大酒すべからず若礼義を失ふ者あらバ

公事にあづかりしてはぶられ血氣にはやり晝夜わかちなく
らず修行せし數々の條目ありて甚しきに一つもそむくこ
とあらバ摩利支尊天の御罰を蒙りて武運に盡し
きうべし初めにかくのごとく誓ひをたてしは忠なりし此辭にそむく
者ハまさしく鎖鎌條不持まじくといへども定まらしなく
鎖の奇特をしらふと定めらる誠にかくのごとくあらまほしき
正大の誓約いとも猛き鎖なり聖人の道といへども此
よめや有て實に武道の奥義といふべし法華經の火
火も焼溺する中あくいなしと説き老子は虎豹も牙と

觸るゝ事なしと数へしも方言にかゝらバ瑣末の技芸
のまねしも甚妙なるにありてハ有難きことも多しされど余
の人ハ変りて親しく少しも其ハ譲りこえもせし
ましきもあるべきものや

丹後の人

奥州津軽の外が濱に在りし比の役人より丹後
の人ハ居ざるやと頻りに吟味せし事あるハいかなる
故ぞと尋ぬる
に津軽の岩木山の神ハ丹後の人を
悪嫌ふ故に丹後の人此地に入る時ハ天気

まりあやしみれバいふなるこゝけの詣りてかくハいふなると
と丹後国同じく奥州岩城山の神と云ハ安寿姫なり
の地なれバとて安寿姫を祭る此姫ハ丹後の国に当る
ひく三荘太夫にくるしめられし恨今に此山の神の
人といへハ忌嫌ひて風雨を起し岩城の神甚しくあれぬといふ
外ヶ濱辺り九十里余皆多くハ漁猟又ハ船の通行にて
世渡るものなれバ常ゝ最順風を願ふ故に殊に忌恐るゝ
天気まさりのあしきことなきハ一向にかゝつて丹後の人を詮
忌嫌ふ事ハかゝる故に此説隣境にまで及びて松前南部

蒼海にては漆くあしまき多くハ丹後人流ゑて崖て出るなし
かゝる人の恨ハ深きものかや

幸の神

出羽国按察使の澤あたりの街道の東方に岩の窟有て
にある岩にかゝる必岩より岩にしめ縄を張り其
しめ縄のもとに陰本まて細工なく陰茎の形を作りたる道の
方へむけて出しあり其陰茎は太くして長七八尺人
だきかゝる程の大さ周りもおびたゞしあるのけしかりぬ
その故にの人にたつねしに彼是にさき往古より誰しれず

あまたも陰茎乃形の石陰門の形の石を神體とし
て、諸の氏神祢宜いはひまつりてたふとびかしづく所
多し日本紀古風土記や神代の巻にいふ所鶺鴒
の古事や神などいひ傳ふる事多かれハ神道乃
秘事にてかゝる事もあるべしとぞおもふ

蜃氣樓

唐土乃詩文にも多く作りて見るやある蜃樓と
いふことあり又海市とも云海上に雲氣くきに立
のぼりて樓臺城郭の形をあらハし其中に人馬

諸書に記せるまでもまちまちにあれども見る人かまれ也。唐土の書物には
一つには是大海の底なる大なる蛤の氣を吐て空中
に樓閣のかたちをあらはすとし、又蜃といふは其蛟龍
のごときものありて海中に住て氣を吐て樓臺を結
ぶなりとも色々の説あり。蘇東坡抔も東海に於て拝ひし
時海神に祈りて蜃氣樓を見て詩を作りし事あり。
唐土にても目のあたり見る事稀なりしにや、荒説をなしていひしが我國は
四方皆大海にて何れの國の人も海を見なるゝ者も多けれど
此蜃氣樓は甚稀也。只越中の魚津といふ所にて毎年三

越中にありし時も三日月の宮と魚津に遊覧し
て蜃気楼を見るべしと人々にすゝめられし余も実に
年頃の望なりしかど富山にありし比は正月
二月なりしバ折しもなからの三日月中にて越中に逍遥せん
事あるゆゑ南国へ帰りしかれハ残念なりしに今に忘れず
しかして越後にまはりしに越後の糸魚川にて杉山茂敦
といへる医師のしれる人も糸魚川乃海中楼、
山の出来るを見たる漁人のいひしまゝつね塩山
といふものゝ如く見ゆることなりといひしと語

一とせ抱余に初めて唐人乃作れる詩稿を見て思ひけ
る蜃楼ハ大洋にあらず半ハ陸地を越入り海
かねてのきゝてしくの中に心得しが魚津の地理を考ふ
にて先のまゝありし便魚津ハ北海に臨める地なるに京
の方七八里と思ふ程に能登國乃山城屏風のごとく
見ゆる魚津の海ハ東よりの入海なる海中より蜃気
る陽氣向ふの山に映じて色々の形を見すと向ふ
に南なく數百里見えわたりし大海にして陽
氣の立ることハあれども向ふの高き山なけれハ映ずることなく

しる人の目に見えたるしとて只に伊勢の空名乃
海まで三十年五十年の内にはかならず蜃樓を結ぶ
事ありといふなれども向ふに尾張三河の山など見ゆる
あるゆゑなるべし又安藝國にても折々八九月と云
是も向ふに山ありしがゆゑにてハ蜃氣樓とむかふ
事いまだきかざれ其と毎む人も三四月の頃越中に
遊びに行て蜃樓甚だ見るべきこと也

佐渡よりの

我が旅行の時はいつにても五戒をたてゝ道中記

○初は大に書付て毎日是を銭入に喰く慎もつて
なるの甚五戒とは酒渇湯河度行其貪賤技之
是皆篤乃人の最負をあやかり福迷するの
めしるへ志ある人まゝ懼るへきことのかは深くおそれ前銭
全くして長生を得へく和蔵術も成就し
て人を救ひ後世をも恵むとも尽さし此五戒乃
事も常によく心得て侵凡事なく足へとも其
時は喉し足は天気も都なるは旅よ京へき
山も越川越しよ無理の蓄銭をもさげし時

きせ年の川御役の事をあらんとも思ひ途の探
会せしよしいく八日宮にても所我なりし人の他意の
志をこ發しなせん事を氣れ毒におもひてまた吟味れ
ぬ事あるとも箸となし旅路遠き事を思しくかの縁端
る際あるし女なる一夜を契るなどし居時に苦の
くなる熟くも然の好みなりし添まそし八大なる災ひと
成らず事之故京に每日月に始めし道中記におもせし
かりそめにも侵さし慎まんと諭るに越後の遥
江濃よまかりしより三月八日のうかなりしか今ぐ即

の旅籠杉屋といへるに入りぬ是ハ越中にて新義真言の
し松軒といふ人此屋の此杉屋に逗留して居ら
ましけれバ旅中此邂逅なかなかすさましきにあらず嬉しく杉翁
いふ者今ハ青柳町にあり佐渡に渡る船あらバよき便船
なりしバかつがつハ渡るべき者にて佐渡の湊一里也しかおもひ
ふんやよき道連あるをバ幸くに彼船の名郎探し
んとするもかかる天気ハ晴れて風も静也又かくよき
便船もまた有りけれバ今日出すなれバいさや彼地に
三五日逗留して風土をも見んとの様と例の不了簡

出く何となく帰るべき時よりの船に乗りぬ継ぎて乗り四
人あまたの客といふ事なし杉軒を従者船頭のことなりとも
かに荷物など積みていと小さき船なりとも渡る事北海は冬
より春に至り風荒く海上は船の往来なりがたく
四月初旬ならでは船を出す事なし此比は天気もうららかに続き
長閑なればとていまだ三月の上旬なるに初めて佐渡へ渡
らんとする船あり是ぞ諸方よりいまだ佐渡へ渡りし船
なければ此内に荷物を積み渡れば格別の利ある時
は風を危ぶまず渡りける船は極初更る頃湊を

出しゟ年老し船頭一人進み出て我平生物を考しに
元来ハ北の方を見る雲少しもなく又月の色も常と替ハいゑ
此程天気よけれハ今まて順風をなしたれバ佐渡よ渡るに大
方の心え北ふ見ゆる雲を能きるハ中途より東の方へ
も船を見へし佐渡山もなくなりても風起りバ佐渡よ着
事難ふしく北風よ吹殺されて若き着元気よくや
帰てあやまちあるを操ゑへしハ聞しめて帰りぬ
元気保ちるき事をハふきのるべしとひなし帆を任
せて小海のお里の程出る所よ北の方の雲と天と接せ

此事心肝に刻みぬれバいかなる事ありとも海の難にハ不
るまじく獨り心に誓ひ居りさりとても波路ましけれ
西より北東に漂ひある程に心神悩乱して譫よ
譫にいふ三年前寿命も縮りし筆と覚つゝ絶るに
天の冥助ありて風又東北より吹出て不幸の中に不思議
もとの西江津乃湊に入りぬ此時乃嬉しさ誠に蘇生
の心地ぞせらいしき杉屋にあづかりもすがらの心労に身も
いたくはうかれぬれバ幾日を經白露く休息す誠に
此直江津より佐渡まで三十五里の海上なるにて

るハれバ千里の末まで蒼浅きに限りなく見ゆる北海なり
浮ぶ此天氣に遊びしに束なくてあまの湊に隔るも
見きぬる不思議の事ども送りしまゝ下社弟なるも
の佐渡までの湊口ハ出雲崎よりハ寺泊迄一ト見ゆ古
寺泊ハ佐渡乃渡り口の所なれバ繁昌の地なり海
上も程とく遠く続き十八里を隔てたり又出雲崎より四
里東北に寺泊といふ京にもあり世にも類なる繁華の地
なれバ寺泊も佐渡へ海上一よき地にして十六里の海
上なりといへどもむかしハ佐渡の渡りはこの湊より寺泊へ渡りしときく

し為兼大納言佐渡国へ配流の時世尊寺阿闍梨よ
て數日風波を凌ぎたまひける時此里の遊
女初君といへるものありけるに初君別をも惜しみ
て和哥をよみて奉りけるを今に所の中程の南側に石
碑に彫付し跡あり碑面とおほしき所にハおもての東乃
白波も立帰る日はなきをかきつけ[illegible]初君しあれ[illegible]
為兼の和哥なくさむよしあれハ続し記録にも
限りなくやさしき事也とて後に玉葉集にも
入られしなり又日蓮上人佐渡ヶ嶋配流の時も

さき後りまして七日の間風病侍のいたはりて其旅宿
の寺も越まりの識に越後にまうむかしより思何に
といひならはしの我等てる抱葦木の身たゞも侍る
べき国といふおもひもうちすぎるに島貴の身にして越
後にとをつに海を渡りてする猿濱の鳴も左遷しての
ちの間いくだあらん初君の手ぞ見るにけても今宵のこと
おもひやりてふる波よ猿の枝をぬかしけり

東遊記巻之三終

東遊記巻之四

親不知

越中越後の堺に親不知子不知といふ所あり北陸道第一の難所として往来の人の恐るゝ道也越中立山乃裾北海へ出張たる所を市振といふ駅より青海といふ所迄を山の下と称して二里半あり立山の裾なる故に断巌絶壁すそハ海に連り身ふく起乱に浪打際を旅人通りける事なれバ一方ハ屹立たる高き山一方ハ大海なれバ風なく波静かなる日ハ

義経乃笈

抑のころ源九郎義経兄頼朝の怒りに逢ひ身の置所なきまゝ吉野を落しなれバ秀衡を頼んとて忍びて奥州に下りけるに東海道ハ途乃守り厳しけれバ北国路を十二人の作り山伏となりてかゝるふふ越前まで来り平泉寺の白山前後より圍まれ笛を吹くゆるりくよ(?)弁慶とのがれ安宅の関も(?)まつ無事なりしが精進の為に富樫の左衛門が情を掛て猶も安き(?)[illegible]なく主としてみて出羽の国三瀬といふ所まて落着

しかるに此三瀬より下ハ念珠関とて六七里つるが岡までハ四里の道安堵しく盗賊の愁ひしもなきによりておもひける其間人くさむる事七ツあり軍書にのする十二人の作り山伏といへるも其数の足らざるハ子細あるべし又泰衡の古城跡平泉の中尊寺より亀井六郎が姿なりとて今も其一つあまりの七人の扇をこ世に三瀬にて姿を残りし亀井などもにて奥州まで負ひ行きしも

胡沙吹

おきふりバ曇りやせん陸奥乃蝦夷にハ見せじ秋の夜

の月此哥ハ篤家々のためあるなりと云所以をよく蝦夷

人に種々の奇術ありと云其中によりて秘術の出くれ

りのを吹出し或ハ敵に遭ひ又ハ猛獣に出合ふ時

雲霧をおこし我身を隠し甚難をのがるゝ事あり是を

コサ吹といふ也又或説に蝦夷人木の皮を巻て笛

を造りて是を吹て是をコサ吹と云コサハ即胡笳なり

笛を吹ば山気動き雲りて月も曇るといふ不思議なる

事とも思ひしらる今度此地に赴く其趣を語に合点なり

呉春寫

越ハいつも暖気なるがごとし其向き方角によりて
気候も相違あることなり又秋田津軽の辺乃村民乃
子供襁褓にハ皮のごとくなる木の皮をうちて寸関さよ
巻く服のあり其甚太古の光朝紹の遺製なり
予これを求めんと思ひしかど一つ携へゆきたくも思ひしか
とも長途行李何物の手まきをいとひやめにせし口惜しかりく
はしく覚えしぞかし

藤樹先生

先生ハ俗称中江与右衛門といひし江州大溝の在中

小川村の産にて分部侯の領地の百姓也王陽明
流の学者なりしが其徒行近时の学者の及ぶ
所にあらずとぞ思へる先年余此地へ来りし事あり尾
州の一士人男半ありく此辺をとをるすぎ先生の墓所
小川村にまゐりて畑うつ農夫に尋しに畑道を
是ハ知る事と申案内しくれけんとて先生ニつく
行く程なく小さき墓所ありて志りし給へ
とて内に入りやがてあるじを見るに来客の新衣を
〈あまた布の小袖の羽織を着たる彼士人驚きて

出ゝ都之の御里方の御領分ま中江藤樹といひ
ひし人ありしか此孝知りや其身稀なるにふ
忍おしまひりしやゝ読り出しに彼人性と改え
藤樹之生の御事ハ我父祖以来る敬いひ
て老父我と愛せる此あ膚の書方へかくまま
鉄く氣て秘蔵の一軸と出しくはさせぬ此
下出なりしハアんせぬし、して奥ま六ケ敷ま
阿め一軸と携へ出くゝ暮よりけ遂まうさりて
称せらけらぬ其ゐる数かくれたるのかりけれハ我もまある

ひにそゝぎおじしてねしてやうね分部侯に
あらくまう昇竟領地の一農夫なるとかくかんで
敎せられ年代を賢と發し徳をそらひのふこ
ともなる龍く文若椎先生も其の大儒なるてと
もさしすべく知りぬとやさきし此二年ばり
おのあまたが此屋よりの理廊なりせば盛すまり謁し講
堂とも一見せむやしとあわらく大溝の京の加茂ふに
ふかよりの東へ入るま八丁ほしく小川村まふゝ農
丈夫茂漢字もそはしくれせ数へ使ふれもうく

て講堂の釈を知らる面白しあるきハ甚つと
あり志村周助といふ医者の許へ案内して講
堂茂ねし示そいひ入るゝにまづ玄関へ上りなん
といふ草鞋がけなりきハ只今なれば講堂の案
内とといへど強く足拭きの水など持来るまゝく
やむをえずしと草鞋脱けし解て玄関へ上る
よ周助出迎ふ四十あまりの無精髭なるの茶煙草なり
世話もなく御たのまゝたる余儀講堂とまねて行ん
扱しる座と迎ハ周助奥より札拔を持て講堂

いとのびて各方にも対面せらるゝことなからむとて有し
次第をくはしく語るに於て其家に書を熊沢
治部八四会よりの指く学文修行最中のをりな
ありしが此諸侯中へ来りくるを儒の儒といふのく
して至和五日そこに江州より小川村に自ら随従
おもむき新に人数につき経の学徳としてよ
よ随従とてしまりし熊沢かくまして帰りしく
二月間蕃樹の門によりまみえて後に蕃樹の花
母共に残る毒がありし此元因へ食やせむとありし

広重画

ぞくのまつりは昔の俤残りける〜都名所図会に
あらはしぬべし

東遊記巻之四終

諸國
東遊記
五

東遊記巻之五

秋田蕗

出羽秋田牧といふ所にありて秋田の蕗の名に
よりてよく言ひけるものもありて我秋田に到りしは三月
の末にて其蕗いまだ不出といふ只大指のふとき
茎あり。是を諸方にて食せしに、もとより此方小蕗ハ
いまだ若葉なる蕗なれば其性甚だ苦く出る人ハ竹
よ似たる方の蕗のごとく中ぞらにして実しはるものハ
あるいは塩漬又ハ糟漬抔にしてハ菜に作

たくさんにもあらざれども賞翫なりし故に京都大坂抔
へは送り登せし事稀なり彼地にては作に六七月の頃
盛に生ずる事也太なるは秋田城下より十里斗隔
てゝ長木が沢といふ所あり此沢に生ずる蕗
長六七尺に及びふきの傘に満る程なりかの秋田
枚にいふ所のものは此所の蕗を云実に奇観なれば
三月頃は一切のものいまだ不出蕗の如きも哉
又さりし草萌なりも少しく秋田に限れり仙
臺南部津軽松前の蕗皆大なり就中蝦夷地

さるやうの細き谷川流れ出て海に落る所
谷は土石皆朱色なる紅の色まで いと赤く
ぬれたる石の鮮明に映ずるいろ誠に花やか
まで目さむる心地せり 落る所の海の小石ま
でも皆朱色なる所ゆへ此辺の海中の魚皆赤し
とぞ 谷にある所の朱の気によりて海中の魚
或は石までも朱色なるにや 無情有情ともに
是に感ずる事妙なり 余もあまり珍しき
小谷川を伝ひ奥深く入りて見るに朱は多し

土を堀りくづるに生色萬あざやかなる大なる
紫石或は折碑きかゝ袖なし海る甚石乾る時ハ朱
色かし墨ごとありて無極の色のごとし此谷の入
口にハ柵ありて人猥に入る事を禁じ守る人あり
て領主の益とせしよし事なりしが卯の年
の饑饉よ餓死うけく甚しく此あたりハ人稀
の事なりしもいふ程の事なく守るべき人もなけ
れバ又盗む人も無し余が拾ひしハ僅三年
の後なりしが柵も破れてやまる人無く通路自

行はありしき時節に来りしともいふべし極上品
の朱砂辰砂よりも及びがたしとも人重宝にあへ
いかさまの益なるらんかし

化石渓

越前國大野領分の山中お波村といふ所に猶
またも石の化する谷あり余も彼地に遊ばんとせし
かども折ふし極月なりしかば通路雪に閉られて至
る事あたはざりし其辺の人にくはしく尋問に大
野の城下より山道九里ましして細き谷川ありて

氷の流れる諸器物何にても半月或ハ一月程入置
時ハ皆石と成る筆紙下駄草履膳椀の類にいたる
まで皆石となること悉く余京都にて先年木の枝に
雪の積りたるが其まゝ雪ともに石となりたるを見たり
又半紙二束をもつ入たるをハ悉くかたまりたるが[illegible]も
小作るく石とかハりたるを見たり其皆谷[illegible]
作りたるものも悉く石と化す但し極陰の地也其水
中に元気の附て久しく漬ける故石と化する也や[illegible]
一しかし只にハあらず夏日にても同じく石となるといへど

是ハいかにして化するにや按ずるに寒気烈しき節谷川の水上より沫のごとき泡流れ来り漸々に凝まり小粒なるものゝ石と成ることく然れバ其谷の奥に玉液のごとく流れ出る物に付て石となるにやと思はる神異記録の事とも書載ありて其中の事なかりしが中にも靈園の内に諸物の石に化せる地あるよしを載たり其谷も其類にや

浮嶋

出羽國山形より奥に大沼山といふあり其山上に

大行院といふ修験道にして俳諧の数寄人俳名を
奥之窓といふ此山の縁記を聞けハ人皇四十代のころ
ど天武天皇の御宇白鳳年間役行者の開基にて蒼
稲魂神勧請の地なり此山のうしろに六池あり
大沼と名付ける池の形大の字に似たるを
もつて名付しとぞや此池に奇妙の霊異あり世間
未曽有の事なれども斯る僻遠の地なる故
分入る人も稀にして知る者すくなしいかなる事
ぞといふに池の中に六十六の嶋ありて生する時ハ小

孝敬画

水面と揺切を将の數六十六といふは日本國の形相に
いふ甚背行基菩薩も此池に至て實方中將も此浮嶋
と見物し給ひしとぞ實方拾ひたまひし時
四つの海波静なる春しまやまの其て浮みて出る嶋なりと
縁こそまさりしといひ給ふ池のほとりに古松二株あり一株
を實方中將の嶋見松といふ實方此松に依りて嶋を
見給ひしと云其時明神感應ありて池水も中ぢゝて
松の根まであらはして一株の松を浪と松といふ浮嶋
岸に池の岸より引出て渚の中ふに入て由出中にて異名大ぁ

る。奥州塚と名付く。此塚の塚にも皆よく気あんにしら
ども今ハまぎれて何ほどといふ事しられず。唯一本
池の中へ突出たる岸根を芦原塚といふ。此嶋ぞ動かぬ
ど青より同じ所にあり。又池の向ふの本社右の方によ
りそひ浮ミたる色黒き木の株のごときものあり。是を浮
木と名付て天下の吉凶をしらしむ。浮たる時ハ天下
太平の象なり。沈みて見えざれハ必変ありとしるし。壇敷
る折しも五月上旬のことなりしが、俳諧の交りの雪を
八大切嶋のまちかしといふて一ト日池邊を先ごく見るに

内面蒼々すつも青く水際にハ芦荻生しげりいとく
奇なる山深く人跡絶たる地なるにいと物凄く稀に
其外の思ひを観せり皓月の光かげかれど仕遠深山にて空
氣清く候へば藤山吹躑躅なども花の形に咲き乱れて
香の勝ましのどやかなるに何なくさらさらとやや清くの浮
出るかとし目もさめて涌居りれども水面をハ只一尺人
斗と七八尺斗の小鯉二三ツの有りてさらさら動く気色も
なく加之鴨との類へ有るやうすも見えず日暮くとまで
守り居りれども見えるといふべきものもなし予日數も西山

小領きしるハ樹ハ岩し雲かゝる常に堀生ばいしきめ
すゞしくあつげく福に愛しく大行院に堀りぬる傳
待ちらく詩結びをねこめひしまゝと同に安置せらる
も多つしといふも王傳日によりて結びぬらぬ
ことも侍る也栄追蕚して又の日了ぬあまねく
增亀いと怪しうこそ待る浮結ぶといふハふしぎにてあるる
べし世に云伝ふることさても多きゝるくも詣ぬ也
よりひなしる人を迷しむる世に多く邪ひこ
ひさ池の不思議も其をぐひなるべしといひかぬなく

わきて湧し出つ静に池の中にたゝへ出ゆくさま
いと見事なし　又去かしこにつく向ふの岸根なる化
てけあら〳〵に湧と出る如くところ〳〵より湧と出る穂に池
の中に数々の嶋出来て柱り渋菜すこゝに傳ありく
嶋嵯峨としひ迫るがごとし目に見え動きて揺しさいえんう
ところ中にも彼奥州嶋のそのやうにいふ二三丈雖みも
及びくいと大きく其嶋の上にも小松生ひ茂りて嵯峨の地咲
うつアそてはくしよ色を争ひたる浮き出て揺れ動き
此不思議といふもあるものあり面白くて跡のあらくしきわ名

のふのしるしを聞ハ是唯今ノ變生ひやべしといふうちぞ
いまだ餘震も去ざれハ又用心して再び破流る人ハ
多つきみゆるにそのふみて數くの病もおくなりて後よ二所
むかし地震厚く揺くかしも動く乱起て坤西ハ重く
行じてやうく地揺りすべしといひて待居りけれ
ども小動くつき色もなければ旅人大きに退屈し
そばまける所よ投入つくハ明る日道のつめの出
されバしてもむかしく古き事をいふ風の事まで
なりけり

大骨

余が奥州に遊びし時南部の内宮古と云へる辺の海濱に
ある大風雨の翌日人の足だちありしと云へる人ありけるが
る故肉ハたゞれちぎれて骨もいまだ全ふしてあるが流寄
より揚り魚類にしてあるか人の足に遠郷しいふ如
ぞうく大なるものぞしらずあるが此人驚き怪しみて去
手遠き所の五六日の後ち余見とゞけて考ふるに東
国村の大骨といひ又我も村里の民家などにて見
しといふ物佛骨なる大なる骨などあり又古塚など

と聞えしハ大なる頭骨を堀出せしにて奥州辺りよりへ
るゝく此寺の井水の中に遺ましまさかゝることを聞しことあり
奥州ましハかゝる骨抜群乃類又其関東の又なる
頭などは甚だ性古の鬼神の骨ならんといひはやせども
く思ひみるに今までさせることもあらじ むかしの人と
ても今の人よりはるかに大なりしとは名ある仙人ともされど
大なりしにハなんとも云べき程なり 余万国の図と考へ見るに
日本の東の方数千万里のおくに巴太温といふ国あり俗に
いふ大人国なり 其国の人ハ長ケ数丈にあまりし 阿蘭

れて人々あやしみ恐れて神にも祭り塚にも納めしと
是は今蝦夷の東北領の大なる足も彼国の人が漂流せ
しか大波浪に足のをうち切られて大風毎に日本の海まで
流れ来りしなるべし　此方にては小人国ありて身の長ケ
二三尺ばかりなるよしなれば南方に大人国ありともいふべし
只格別に大いにして人情も世界とはあまり違せる事もいまだ
千島の通語もありけれど紅毛の國などにも知られざるなるべし
近き年ハ阿蘭陀の國とも交りて諸蛮夷
の事迄も通辞も知りたれバはひ小人大人國も知るべきにや

金華山

奥州金花山は日本にて黄金の出初し山なりとぞむかしこがね花咲しとよみしハ此地なり又日本東方の限りにあつて景色無双の地実に仙境ともいふべし仙臺より東北の方にて東海廻船の入る大湊なり石の巻の湊より解纜の地なり石巻の渡波といふ所より舟を傳ひ山に登りて大なる峠を越え行程十餘里にして山ありといふ所に至るまでハ船路しの小家ありて金花山向ふにまでを是金花山へハ海上を隔て是より渡ハ渡るくして渡りけ

東洋圖

いかなる丈夫なる心の者にても谷危さに堪かぬる所なり
八寺院一宇ありて弁才天鎮座の山なり絶頂まで四千
八丁といふ路をのぼる六十里の祠まで二千四丁といふ
常にして権現の社あり籠岩として天女出現の灵窟あ
り岸とふ一紙にある所に水晶石といふもの見えたる数十丈
廻りも数十丈ありて全体六角の白石なり明徴にきらきら
ほる是を下るものなし此上も奇品なり又石上に一本
の松自然に生じて海風に年の序を経たれバ幹は枝
ぶり人の作りて造りなせるがごとく景色たぐひなし 金花

此山ハ山中皆黄金なりといひ伝ふ故に今とても海の砂皆金
色にして波に映じていとうるはし山中の岩石に金の
気ありて吹出し道路も皆金色なるゆゑ権現の黄金と称す
くがね山とよめりといへり旅人かならず此土を掬ひて又
国府に舟をもとめんとする者ハ其山中までもきこえし
草鞋と経を捨て舟に乗りて帰る草鞋を付る砂
金銭陸地へ流れまじき権現の恩ゆゑとぞ此辺の海
にてハ海苔和布鹿角菜のたぐひ多く生じ此辺の民
是をとりて産業とし又海風を生ずる海にはまさる

迴門とよばるゝ處浅けれバ浪逆立嶮岨なれバ潮のへ
かゝると知られたり唯此海ハ廣く深き故不成操して
るゆへなりといふ理ハさもありぬべくあれども實
境に逢ざれバ心得難く思ふ事も多きものなり

七不思議

越後國弥彦の驛より南に入る事五里にて三
條といふ所あり甚繁華の地也此三條の南三里
に如法寺村といふ所あり此村に自然と地中より火
のもえ出る家二軒あり百姓にて庄屋つとむる者の家に

差込置たる竹筏續けハ千丈へ何方迄も引つゞきて土木
るべきなれども水のごとく前後左右へ出入のありてハ出来ず一
方の手の外へ気の洩ざるやうに竹を續ぎて導
けずとも自ら及ぶなれバ広大なるべしやしく難く
懐中にありし印矩を取出し件の火にうつけしまに
岩の火のうつりへ印矩おしやけこけより風雨の日のめの
證の種と申けおろし印矩お猶更の其昔ハいつのころ
よりおそろしと聞ゆるに正保二年酉三月始家まそく
始いごを吹しときあり其時ふと地中より出してのちさ

今天明六年丙午の年まで凡百四十二年の間一旦も絶
ることなく出きし初めし時より挽臼とふせしかバ是
とをくばかりや絶ることもあるべきやと気づかひて此家
普請などある時といへども此挽臼を動かすことなし
といへり誠に数代かゝる此家のゝ油火を用ることなく文
かしの物などハ黄或ハ焼ても未足りて大なる竈と
いふべし又此如法寺村より十里あまりの東北にカラメキ村
といふあり此所にも出るといふ余ハ如法寺村にて委敷
見たりし所其カラメキ村へハ行ゝの妨かる事 歴去まで

もありくあやまりてくさ火井と名付るといふ日本の地
まさりて他國にハ希なる事なり
一臭水の油ハ芝田の城下より六里ばかり東北に五川といふ
村あり其名川の東南五六丁ばかりに藪村といふあり其村
小綱名川といふ小川あり其川端に少し広き所ありて
杉林あり其所に小き池ありて其池に油漂くこと多し
其油の出る池此地に五十余あり是といふ余ハ入口の広サ四五尺
四五尺ある池の大きさ四五斗或ハ五六斗ばかり七八斗ばかり
ますます油の出るハ多し其池の水中に油ふき出て

出せりきるまゝの小や
一波の題目といふも寺泊りの海中にありむかし日蓮
上人佐渡へ配流の時海上小舟のひし妙法蓮華経の
文字入りみ給ふゆへ法華信心の人船よりこゝを通く其所
よこあまハ波の上に題目あらはるとかや
一逆根竹ハむかし親鸞上人当国へ配流の時携へ給ひ
し杖をさかさまに地にさし我説所の法世にひろまらバ此杖
の竹ふたゝび栄へしといひ置給ひしに其杖さかさまに茂りが
らに枝葉しげり其後ニ根より生ずる所の竹皆逆根なり

しるし今ハ其古跡のこし鳥屋野といふ所にあり
一八ッ房の梅ハ文田といふ所にあり一ッの蕚に花実八ッなる
のる不思儀のものとしてもてはやせしに是ハ八重の論梅と
いふ方にも多くあるものなり筆をあハせて七不思儀とも
いふ是ハ我等に三度栗とて一年に三度実のる栗あり又
繋ぎ榧とて親鸞上人糸にてつなぎおきし榧の実
を植しといふ今にかやの実に糸の通りたる穴あり
又いふ又七ッ坊主八ッ瀧とて八ッ行の見えハ瀧のごとく
見えて七ッ坊主の坂にて面る山あり其山を向

一八さだかに知りがたし大概方俗のいひ傳へにして妄説を辨じがたし

一弘智法印の遺體ハ至て奇物なり諸方へ持出て開帳をもなし又東奥紀行にもくはしくしるすと載く既に印板に行はるれバ今こゝに略す

東遊記巻之五終

東遊記巻之五 未

平泉

奥州平泉ハむかし奥羽二州乃太守鎮守府将軍秀衡父祖三代居住の古城跡なり仙臺の城下より行程二十四里餘北の方みちのく前に北上川衣川を受けうしろハ高山峩々たれとも至く至り要害の地之秀衡清衡建立せる中尊寺今に存在して背の後ハまのあたりに見えてくおりほし此西成関山ていふ禁乃街道より背関所ありて衣の関と名付く

此辺に北山を関山といふ中尊寺の山号も是也
辺の里ならびに上衣下衣といふ高館あり衣
の里にて流るゝ川也衣より衣川とも名付け衣の里なり
関所也衣の関とも云ふなるべし安倍貞任ら籠
りし衣川の柵是也此中尊寺より一二里ばかり
りて山に入りてあり文殊経の経あり高舘に
に此関山の下まで続きし街道を筋と見て中
尊寺よりあり入道の鉢の弥陀を安置し像の
所々の中に常の城郭有乃跡あり

足の汗ありやしわるゝ手を當る福に燈心入て振ひあつる者
新ますし鶯きらし沸より志りて拘き草用ひ火入てわざ
あるしを以てしと回向して雑炊食をすゝむ未時汁まで
せうしかし手足を働き香を廻アよりく其ハ精神を惜しがまちハ此人数
ますもし猿つひしハ米新をかし安堵をら亭主のいふまゝ
廿川あまてハ猿の人毎年まあ度ツヽハ雪の頃ハ倒るゝこしわり
今日まで貴ハよみに入りて目をたしゝ云此所ハ逗留す人ころ家もも
一つらま是八ツ八くとも手足を動くせうに成りて厚く謝礼式の人ど
廿次の町の相井ハ以む驛ハ泊り以て服薬をし小方服常ハ
復しゝ今まで二日余逗留保養しくせうく小食ハ入ると丞で

恍の音聲に逢て命拾ひしおりんとし其恐ろしさ事戒知
まり初の程ハ喜びも危さ無うに尽しかとも後ハ無程にして余
ハ既に死さんとせり余ハ事に際んて氣ハ咽割にひれしとも天禀
虚弱の身から激烈成事に堪ることあさりハ喜びハ忘氣を
かし怯なきよ身躰充実して丈夫なるハ二年の旅中なく
恙無くしてめぐるこの危険找淺り識に恍ハ東方の人れ
信しからぬものこ多りしき

床下の聲

越前國福江の近邊新庄村に百姓の家の下まて何物か
あらわれて人のいふ音の男女大さ驚ききさ

気に床板を引めくり見れバ何事も見えず又床をふさぎ〳〵て
物いふ時ハ何事にても床の下より口まねす後にハ村中の沙
汰となりおそろしき者共毎夜大勢来り集り色〳〵の事といふ
小声にて床の下にて口まねをするおのれハ古狸なるべし
といへバ狸にてあらずといふ然らバ狐なるべしといふ又狐にも
あらずといふ猫かといふにあらずといふ鼬河太郎獺鼴鼠
など色〳〵の名をあげて問ふにいづれもあらずと
如く答に猶しハおのれハ何ぞ妖なるべしといひしにかならずさ
妖なりといふこれよりかの妖化物と異名して世上一遍
大評判に成ありけれバ此事城中にも聞えしかバ奇怪のことなりとて

吟味の役人大勢来り一夜此家ニ居て試るに何の変も無し
役人帰りし後ハ其夜ハ又変ありて以前のことくなりといふに其後又
毎度役人来りしかど其来る夜ハ其変をやめて出ず故
にせんかたなくて主人に打捨置しを見届けしてこれは
何の変もなく怪事ハ止まりぬ何の所為といふことも知
らずしてやみけりといふもあやしきものなりと語りぬ

飛根の城跡

出羽国秋田城の東辺既に津軽の地に近き所に飛根と
いふ所あり此辺津軽の境にて山の麓川の流れ
頗る要害の地取なり殊に此所ハ高くして或ハ

川々と云ふに受取て其山相對し或ハ数里一望に見えわたし並べて
皆山のごとく平にして古城の蜿蜒と續きたり其間どとして地形の
城跡に異なくして地面広大にして十町弐十町に連なりて或ハ中
小き山高く四面ハ山の要害のごとく築重なり或ハ山連なり層せ
して所々に通路の道を開くとみえ山ハ何れも皆平にして
く人服して山城築などしたるのみ天然の山の要害ハおのづから
をはかりまて何人乃城跡成ことも今ハ知る人もなし又古書
傳記などをはかりかねて廣大の城郭で構へ住ける人も守
りまて日本紀など上古蝦夷を征しつゝ鎮府を置しやうにも
見えれ何の事もなく人力を費したる豊臣太閤などの千

倍ふとまさへ一日ふ古今いまとさへて学ハす椀するふ上古の世
霊秀の住たる所彼人ふ擢ての豪傑ありてかくのことくなると
なきしといふべきの仰ふ博物の人ふ尺をハ営ずる所とわ
らんや是を人の此法をぞうあすしバ書すぞう文津記ふして
彦か宮の山の小里ふ城跡あり是を彦根宮のごとく山降ぐ
前ハ太湖を更ろ兵倉の跡武ハ城門の跡を嵓端とありて見
山崎城跡と佐山のるふき古城の跡柄まうハ格別ふ大けれども
彦根のごとく数里ふ連り四方ハ不ひこまる所ハあらじ彦
根ふくらぶるもハ十分か一歩ふ足らず此彦か園ハ何人の城跡
すくも所の者ふ尋ぬふ是を何人といふこと知る者なし

亦の人々も呂城泊と計覚へけり今に土中より古刀陶器等種々の兵器を堀出せし事多しとかや爾バ纔に三四百年の五六百年にかとざらん事にて文華盛なりしハ書傳ふる人もなくてありしか詳なる事しらず

舎利濱

奥州外ヶ濱に小ホロヅキといふ所あり此海辺に舎利濱あり小石濱なるが其中に舎利石まじりて白きあり飴色なるあり大サ豆のごとく米粒のごとく明徹滑澤にて愛すべし此にて通用一日ハ天氣よきに朝かまへしハ濱辺に座し舎利石をとりひろひ楽り回向して後の盃杯ハ此舎利石ひろひたる者等

すくなり材に奇なるものハ此濱の磯ちかく海中に居て長さ四寸間
蠣の舎利母石あり此舎利母石より常に舎利を産し出す
舎利とちて此濱に赤あげ古今絶ず此所に舎利多し
とく又舎利母石水面より舎利を涌して流て居て濱邊よりハ見えてさ
し此邊の漁父ハ釣めハ海底に没入して玄蕃まて拾ひから
取めがる事なり此所に此舎利母石を得るものハ頗に難し
されど捜索ありてバ舎利を指の爪程の舎利母石一ッを拾て
帰りて舎利の色ハ蒼黒く玉の化したるもののごとくに
して其中に米粒のごとき小舎利夥敷孕みたり誠に奇
なるもの也又此舎利濱のさきに今別といふ所あり此二里也

守る人をも斎戒門戸を禁じめてみづから忍び卒たまふもし浮気あ
しきことかある人は悪き遍地なりし道行人の取に任せ流さん禁
ずる者すなはち失つるとぞ云伝へたり

洞山

出羽国秋田城下より東南の方を道をとりて十八里の所に
阿仁といふ所あり此村に洞山あり中に高村けいへる飛鳥洞と號
ふところの如く堀入穴の中をとしキナイといふ其奥深く堀入こと
入る者皆サザイ殻に燈火を點入るなり扨数十町奥深く
堀入り世界の風気通ひてある所を色ありは燈火すなはち
きゆる人も亦呼吸の気息たちまちに

入りくる燈火消ることく人を死なしむといへり是亦あやし
羽州秋田の阿仁の山より出る所の岩緑青孔雀石なとを産
す数寄者の玩ぶ所の珍器多し其内の杯も墨花大なると
の事しとかや

廣徳寺の門

東都下谷に廣徳寺といへる禅院あり此門格別に大なる
門にもあらず又彫刻の工を極しといふにもあらざれど是を
東都の人毎にしばしば口すさみに廣徳寺の門といふ事あり
てかたく杯の事に言ふ八街亭教にまして寺町の
ちくの門より是程の門も多し何の故に聞へしと其の大王寺

太工写るハ多し深く造りけるに樗文寺切くは涸ハ作るに危き事
ひりしかけ尸細殿かりのは妻の世ふあらこなどとら吹例ぶまた
るとこ殿さ北八門閣の多纒尸寺琉璃ふるかくのぞし今東都を
南ふ海を受東ふ山嶽遠く東西も樗平原の出ずして風ゆるうら清
るの絶学なる真京寺くするる盤景きすの気たを悉く蔵と連称
篩をすこぶる色八考なく失火ありる時ふ延ひずくして大火ま度か色
もぞへ後るふ彼寺つるゝ文人と賊して建るる風の患ひ避け大
の気纒近るゝ地を悉しく大幸の慈家と覚ゆへ清る面く
いかなる日寛智の者の好ミるりそりとらひしふ為る彼大工を以て真て
死ちる事る眼前の好合ふ流て大利の得失とふつくすうしく

山深谷ハ六月雪消ざれバ氷柱の露ふるごとく水晶簾の
ごとく氷厚く堅くしてとむるのごとし大河急流といへとも皆
氷りて車馬水上を往来すれバ夏ハ足袋頭巾冬ハ春の二
季ハ寒ぐるしむ事なかりしんべ火燵のそなへせず囲炉裏ハ大
かして昼夜爐に火をたく又九十月のはより春三四月
のはまでハ毎日毎夜天気曇りて雪ふらざれバ霰霙ふりたり北
風すさまじく烈しく吹て面むくべきやうもなく此所に秋冬
出る事なく夏ハ冬のごとかし草木も皆色白く東方よ
りハ春秋かけ竹類も無し松を又梅桜桃李躑躅
梨柿李石榴枇杷雪消て後に開く也皆四五月のはに一様に花

咲ざる梅ハ移ろバ春ふあると花咲こと一致して寒ふ花咲こと一度ふある
東国の梅ハ春ふ花落ずして花咲べき北国の梅ハ葉おそく花後く
気候の遠近かくのごとくなれバ西国ふ北方ハ冷暖の気ふて
春までも寒く東方ハ暖和の気ふて冬までも寒からずして北方ハ
巌石堅剛なるゆゑふ山嶽嵯峨として高く聳え天ふ類して
海も亦深し越中立山の沖ふ当る海ハふかさ三百尋の縄
ふ入どもまても終ふ届かざること其海至深し東方ハ石少なかる
ゆゑ土地ふ骨なく山嶽高く聳ゆることあるも只東雲の低平
なる山なく海また浅し地球の中まて凡日本程山なく
海深き国まれなる故ふ万国の地理論者ふ出ふあり

日本の内にても南方の山ハ平穏にして巖石すくなく樹木茂りて土地ゆたかなれバ人の氣も剛柔の和適あり獣も北方ハ猛悪のもの多し熊狼の類も北方のものに標悍の氣ありて毒多く物事ひろくなるものハ北方にハ稀にして南方に多し只中部の地ハ四時の氣候正しく生類も中和の氣を受けて剛柔の偏なく万物ゆたかに備りて實に至美の縁なり

名山論

余幼より山水を好み他邦の人に逢へバ必名山大川を問ふ皆各こその國の山川を自讃して天下第一といふ故に信じ難し既に天下ほとんどめぐりつくしぬれば以て是を論するに山のたかさの高

其外第一とし又鎮海すしを次ハ加賀の白山なるへし其次ハ越中の立山其次日向の霧島山肥前の雲仙嶽信濃の駒ヶ嶽出羽の鳥海山月山奥州の岩城山岩鷲山之是ニ次て豊前の彦山肥後の阿蘇山同国久住山豊後の焼ヶ嶽薩摩の海門嶽伊豫の石鎚峯美濃の恵那嶽御嶽近江の伊吹山越後の妙高山信濃の戸隠山甲斐の地蔵嶽常陸の筑波山奥州の吾妻山御駒ヶ嶽是之ニ鎮ハ称し海ども小不足伯耆の大山上野の妙義山ハ全いまだ是とらず其余信ハ知らず出羽の羽黒山のここに言ふ忝るなれども三山ハ低し郡の類る山なると乃ひぐす湯殿山も叡山より低るべくミ山是ハ佛神垂跡

村小名田村ありて白玉を敷るがごとく見ゆる目ざましき地也又山の姿のよきは鳥海山月山岩城山岩鷲山荒山海門嶽なり皆是富士山に似て一峯秀出て画がけるがごとし又京近き双なかりしこ薩摩の桜島山ハ蒼海の真中に只ひとり離れて独立し最険峻なるハ日光山の映じぬれば山の色紫に見え絶頂より白雲を蒸がごとく烟常に立登るさまへハ青々としてさながら香爐に似たるがごとし大抵海内の名山皆此に次ぎて二ありし其山内の奇絶ハ又別に書あり今此所にハ唯其形のみを論ずるのミ

鰍先

蝦夷の湯ハ文物いまだ開けずあらゆる蛮夷の風俗にして唐日本の

太昔のころ金毘羅淺といふもの有て纏羅猿猴といふもののごとき
し唯ひとしくおもひ傳へしる廣物あり鍬先といふ金鐵にて作れる兜
の鍬形のやうなるものなり蝦夷地周廻八百里といふ海中に浮ぶ
比鍬先を持傳へたる者三家にあるといふ此鍬先ハ奇神霊のやう
とて疫氣或ハ災難ある時ハ是に祈誓すれハ奇特ありとて
たふとするなり家に此鍬先を持傳へたる者ハ浦中の者より
遠慮して自然に其和の如くに敬ひ居るとぞ此鍬先を
古き物にて我子百年のことのとも古事を書物にて古き
傳来をしれざれば何もの時のものにて何の用になせし物ともしれ
ず一說にハ源義經蝦夷地に渡り威を振ひ夷人を從へる数し

ゆゑ昔ハ義経主従の兜の鍬形と今に伝へてありといふ説
あれども余彼是の人に問しに兜の鍬形よりハ大にして鉄に
て作りたる丈夫なる物といふ事をきけバ兜に立べき物にあらず余
按じ考ふるに日本神代の頃の耕作の具なるべし周公
たる形と東方の手にもちて田畑を耕したるものなるべし然るに
其後世に至りて人の賢く世智くして能く耕作もせまほしくお
もひよりて便利なる所作へおしく具を工夫して終に今の
木の柄を付て今の鍬となせしなるべし今の鍬も木の柄
をもち挿もハ鍬形よりおこる耕作第一の具にして人民飲食
の根本となるよりの昔に鍬形の神代のやうまでハ此所までとよ

無き寶として貴がりて蝦夷人の大むかしより子孫代々家に傳へ置くと
しかれどもありし和人の寶とするやうに貴き物と傳へて總ては其本
ゑ穢不計と彼蝦夷へ傳へたる故今に至る宝物となり居るなり一蝦夷地
ハ昔より田畑なく耕作をもせざる國なれバ無用なる鍬の事由へ唯何と
いふ事も無き宝物として反而今に傳り居るなり日本にハ耕作の為に一
旦ありし今の鍬の如き便利なるものを考へ出して後ハ不便
利なる大昔の鍬先ハ皆退てすたりて今のスキ鍬となりし
たる由へ昔の鍬先日本にハ無くなりて居るなりすべて蝦夷
人ハ日本人を神明のごとくおもひ居れバ其持来りし鍬先をよ
限らず日本の古物破損しても数百千年持傳へて宝物と

し居る之刀劔の具目貫鍔の飾或ハ蒔絵の漆器などニ至る秘
蔵して宝物とす居る之是皆日本古代の細工物ニて高く
不惜値へ伝へる仮令ハ不珍重し居るもの之蝦夷象眼などを
新渡として作りたる物又ハ古渡又満州韃靼地より渡り来りたる物
までめづらしと日本より蝦夷地へ入る仮令ハ又買置し是を尊ひ日
本まで重宝する事なり是等の物まで老人金するに継えても日
本神代の耕作の道を知る者の疑ひなかりしず押夷人ハいかなる旅ニ
ても宝物として什器といふよ或ハ人と争論し又ハ罪ある咎し
過とする時たる宝物一品二品或ハ三品四品とも衆の掟言ふよりて
是を出し無くてまびろき事なりいかなる罪あるとても宝物を人

くハ切わたしたるゆゑ雨降るたびごとに谷々の土砂流れ出て
次第に川に出て浅くなりぬ京をはじめとして江の湖水な
ど四方へ廣がりたる四方ともに数十丁に及べりとぞ白髭明神
の鳥居も昔ハ陸地にありしが今ハ湖水の底深く入りて見えず
竹生島の瑪瑙石の橋も今ハ水底数丈の下になりたり是
湖水の底に土砂流れ入りて浅くなりし故水四方に溢れて
湖ハ廣くなり水面ハ高くなりたる也淀川なとまでも昔も
ハ水面高くなりて淀伏見の辺の堤高くなりし堤の上にある
里並木の松今ハ堤の上ににありし堤の外の田地よりハ川中の水
面高き事数尺に及べり七八十年おゝよりハ七八尺も遠くなりといい

ニ入りてハ馬上にて往来するに落葉の如く傘のごと
く頭上より露ハかゝるゆへ蝦夷人も旅人向ふ
のもの多しされど秋田津軽辺極めて北地なれバ
竹なく是等の草木なきゆへ其の多ししるし
中より出のごとく蝦夷の地ハ只竹杖馬蘭車前獨活
仙臺萩蓼甚多く且肥大にして葉も厚く
るものすこし目をおどろかせり又熊笹ハ深山にある
笹にて彼地にて根曲り竹と云蝦夷地にしてハミヤコ
ダケと云蝦夷にあるハ大小ありて長ハ数尺ハ

とくさも杖径ふるものなし奥州の内より黒き楮を
ひろの王子ハ吾ききものゝ蝦夷地にきたるよし
累て吐りの絶ごなる糀の皮ハ玄珍重する沖中な
り我ひろのしきあ田の人年なる黒色まくさき
なきのたし

朱谷

奥州は経の外が濱に平鼓といふ所あり其所の小
よあり巌石海に突出たる所あり是を石碑の鼻と
いふ其所を越てまし行ば朱谷ありて山ところ峯

西遊記後編嗣出

寛政九年丁巳正月

京都寺町通松原下ル
勝村治右衛門

大阪心齋橋通安土町
吉田善藏

書肆